

フィンテック—金融セクターのすばらしい新世界？



クリスティーヌ・ラガルド

2017年3月21日

スマートフォンからクラウドコンピュータに至るまで、テクノロジーは通信、ビジネスそして政府を含めて、社会のほぼあらゆる側面を急速に変えつつある。金融界も例外ではない。

その結果、金融界は重要な転機にさしかかっている。確かに、ブロックチェーンを応用したシステムなどの新技術が広く普及することからは多くの恩恵が期待される。しかし、金融の安定性へのリスクのような新しいリスクも生じてくる。2017年ドバイサミットで私が言及したように、このことが金融規制当局の取組むべき課題を提起している。

例えば、仮想通貨あるいはデジタルトークンの法的位置づけをしなければならない。われわれは、最適な顧客管理手法を考案して、資金洗浄やテロリストの資金調達と戦わなければならない。フィンテックはまた、マクロ経済的な影響をもたらすのであるが、IMF加盟国がこの急速に変わりつつある環境に適応するのに役立つ政策を立てるにあたって、われわれはその影響をよく理解しておく必要がある。

急増する投資

金融テクノロジーあるいはフィンテックは—これは新しい金融システムの産物やシステムを開発する人や操作する人を意味する用語である—従来のビジネスモデルと張り合いつつある。そして、それは急速に成長しつつある。最近の推計によれば、フィンテック投資は2010年から2015年の間に4倍に増え、年間190兆ドルに達している。

フィンテックのイノベーションは多くの形態—ソーシャルレンディングから高速取引、ビッグデータやロボティクスに至る—を取ってきた。成功例は数多く見られる。例えば、ケニアや中国における携帯電話を使った銀行業務は、何百万人もの人びと—これまでは「銀行外し」に遭っていた—を金融システムの本流に取り込みつつある。また、途上国の人びとが仮想通貨取引によって、国境を越えて速く安く資金を移動できるようになったことも思い浮かぶ。

それら全てのことは、より創造的な思考を要求している。一体このテクノロジーの変化は金融界をどのように変えるのだろうか？ 銀行がソーシャルレンディングを容易にするブロックチェーンを使ったシステムに取って代わられるのだろうか？ 人工知能が熟練した専門家の必要性を低下させるのだろうか？ そして、もしそうなら賢いマシンが投資家に対して、金融についてのより良いアドバイスができるのだろうか？

真実は：われわれにはまだ分からない。フィンテックには巨額の投資が行われているが、現実世界へのその応用のほとんどはいまなお試行段階にある。

規制における課題

そして、規制に関する課題はいま持ち上がってきたばかりである。例えば、ビットコインなどの暗号通貨は、国境を越える匿名の取引に使うことができる—これは資金洗浄やテロリストの資金調達へのリスクを高める。

いま1つの—中期における—リスクは、新しいタイプの金融サービス供給者が市場に参入することから生じるかもしれない金融の安定性への影響である。

問題は山積している。新しいテクノロジーの基礎となっているアルゴリズムを何らかの方法で規制すべきか？あるいは、テクノロジーが進歩するための時間をもう少し与え、イノベーションの力がリスクを減らし、恩恵を最大化する余地を与えるために—少なくとも現時点では—規制を一時中断するボタンを押すべきだろうか？いくつかの国では、創造的で先見性のある規制のアプローチを取っている—アブダビにある「検査機構」や、香港の「フィンテック監視サンドボックス」のような「フィンテックサンドボックス」を設立しているなどの例がある。

これらの取組みは、綿密な監督下にある環境の中で新テクノロジーが開発され試行されるのを可能にすることによって、イノベーションを促進するよう設計されている。

ここ IMF では、フィンテックの動向を詳しくモニターしている。昨年、われわれは仮想通貨についてその規制、金融、貨幣への影響という側面に着目した[研究論文](#)を公刊した。それ以降、ブロックチェーンの応用をより広くカバーするために、われわれは視点を広げてきた。最近では、この分野における動向をわれわれがより良く理解できるようになるために、「[フィンテックリーダー上級諮問パネル](#)」を立ち上げた。5月には、フィンテックに関する新しい研究成果を公表する予定である。

私の見るところでは、これらのことは全て金融セクターにとっての「すばらしい世界」にあたる。ある人びとにとっては、この素晴らしい新世界はぞっとするような将来ビジョンに見えるかもしれない—あたかもオルダス・ハックレーの有名な小説にあるように。

しかし、「テンペスト」に出てくるこのすばらしい新世界についてのシェークスピアのセリフも思い浮かべることができるのではないか：「なんとすばらしい！善き人びとがかくも多くいることよ！人類はうっとりするほど美しい！おおすばらしき新世界！」

クリスティーヌ・ラガルド (Christine Lagarde) は国際通貨基金専務理事。1期5年を勤めた後、2016年7月から2期目に再任。国籍はフランス。2007年6月から2011年7月までフランスの財務大臣。また、2年間通商大臣も勤めた。

同氏は、独禁法と労働関連の弁護士として多彩で際立った経歴を持ち、Baker & McKenzie 国際法律事務所のパートナーに加わり、1999年所長に選出された。所長職を2005年6月まで勤めた後、従前のフランス政府大臣職に任命された。同氏はパリ政治学院(IEP)とパリ第10大学ロースクールで学位を得ている。また、1981年 Baker & McKenzie 勤務になる前に、パリ第10大学で講義も担当した。詳しい

経歴は[ここ](#)をクリック。